

## 満州国国立中央博物館の展示活動：新京本館大経路展示場の場合

著者	犬塚 康博
雑誌名	関西大学博物館紀要
巻	1
ページ	178-187
発行年	1995-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/16517">http://hdl.handle.net/10112/16517</a>

# 満洲国国立中央博物館の展示活動

—— 新京本館大経路展示場の場合 ——

犬塚 康 博

## はじめに

およそ六年半という短命でありながら、凝縮した一生を終えた博物館があった。満洲国国立中央博物館（以下、国立中央博物館と称する）である。それは、紛れもなく日本人が創設した博物館であったが、戦後日本の博物館学はこれをまったく等閑視し、また直接の関係者も寡黙だったため、評価・分析される機会も勢い限られてきた。<sup>(1)</sup>しかし、遺された記録をたどっていくと、日本博物館発達史上における同館の重要性が注意されるようになり、この点を予察的に示しながら、この間検証を進めてきたところである。<sup>(2)</sup>

さて今回は、国立中央博物館の展示活動をめぐり、特に新京本館大経路展示場（以下、大経路展示場または展示場と称する）を概観してその性格を覚え書きし、これまでの作業の一部としたい。<sup>(3)</sup>

## 一 大経路展示場の概要

### (一) 経過

大経路展示場は、満洲国の首都、新京特別市に設けられた最初の博物館施設である。展示場のあった裕昌源ビルは、旧長春城内に近接する長春大街と大経路との交差点南角に位置する、平面略逆L字形の鉄筋造四階建ての建物であった。これは、百貨店にするために建設されていた中国人資本家王荆山所有のビルであったが、景気悪化のため本来目的の利用が果たせず貸ビルとなり、満洲劳工協会や満洲炭礦株式会社、満洲航空株式会社などがテナント入居していた。国立中央博物館も、日中戦争の進行にともなう庁舎払底と資材不足とによって本庁舎建設が困難となり、一九三九年三月にその一階の二を借用した。

入居当初、国立中央博物館はここに籌備事務所と資料倉庫を設けた。

この頃は展示場を別の場所に設ける予定でいたが、一九三九年一〇月になって新京駅前中央通沿いの本城ビルに事務所を移転し、翌年一月には一階全フロアを占有、さらに同年三月初旬、標本整理場を満石ビル（蓬

萊ビル)に確保する過程で、裕昌源ビルに仮展示場を開設することになり準備を進めている。このように、裕昌源ビルの展示場化はあくまで仮のものとして始まるわけだが、以後も状況の好転は見られなかったため、より本格的な展示場としてオープンすることになった。一九四〇年七月一五日に開場式をおこない、翌一六日から一般公開された。

そして公開以後は、確認できただけでも二度の全面的な展示替がおこなわれている(後述)。特に二度目の展示替は、一九四五年八月一五日の第二次開館式となって結実する予定であったが、奇しくも第二次世界大戦における日本敗戦の当日となった。翌一六日、大経路展示場は反乱民衆によって破壊され、満洲国とともに終焉を迎えたのである。

## (二) 展示場の形態

展示場となった裕昌源ビル一階は、構造的に約四六〇㎡と約二三〇㎡の大小二室に分かれ、それぞれ別個の出入口を有していた。展示場はケース内展示と露出展示とによって構成され、ケース内展示は、百貨店として作られたこのビルがもともと有していたショーウィンドーと、特別注文製作したケース各種とによっておこなわれた。特注ケースは、大型センターケース四個、小型センターケース一五個、ウォールケース一〇個、デスクケース一〇個、テーブルケース六個の計四五個である。すべてスチール製で、昭和製鋼所より材料を調達し、熊平洋行が製作した。色調は藍鼠色とし、「形状はクラシカルなのを避け、メカニズムにセセツションを配し、単純で稍モダンなものにし」、「内部に張つた布地もまた外部のそれに準じた」(一六七頁)。またキャプションは、白地に黒

色の輪郭をめぐらし、明朝体風の字体で情報を墨書した。当初は印刷を予定したが、結果的に専門家の手書きによつたと言う。

## (三) 展示場の内容

大経路展示場は、国立中央博物館自然科学部の常設展示場と言うべきものであった。展示は、I動物、II地理、III鉱物、IV地質、V物理の五部構成からなり、先の大小二室を、それぞれ第一室(I—IV部)、第二室(V部)とした。まず、動物の部では、鳥類、哺乳類の剥製標本が展示されたほか、シベリアトラを配したジオラマなどが設けられた。地理の部では満洲国の大型地形模型やホジェン・オロチョン・モンゴル各族の民俗資料、白露エミグラント農民住宅切断模型が休憩室兼用で展示されている。また鉱物・地質の部では約六〇〇点が展示されたが、特に化石標本は国立中央博物館の中核コレクションであり、その中から優秀な標本約一〇〇点、先カンブリア紀から新生代沖積世までの層位学に関する標本約一三〇点が展示され、まとまりを見せていた。なお、アメリカ国立博物館は、約五〇点の化石および鉱物標本と約三〇〇余点の文献を、大経路展示場の開設を祝して寄贈してきたが、この標本の中からも三〇余点が展示されている。さらに、満洲地質調査・研究の先人の遺品も展示され、科学的側面を構成した。そして物理の部では、電気に関する実験装置等二二種類が展示され、実演や体験ができるようになっていた。出品総点数は約一二〇〇点を数え、この時点での所蔵資料約六〇〇〇〇点のうちの約五〇分の一が公開されたのである。

以上のような構成でオープンした大経路展示場は、以後、部分的な展

示替を随時おこなっていたが、二度にわたる全面展示替はおおよそ次のような状況であった。

まず、一九四二年二月に実施された一度目の展示替について、博物館の刊行物には記録がないが、『満洲新聞』が次のように報じている。<sup>(5)</sup>

大東亜戦争下無敵皇軍の赫々たる大戦果とよめく建国十周年の歴史の佳年を慶祝して国立中央博物館では科学満洲の実体を表示する貴重品を陳列し日満両国の祭典に遠く参加する東亜の諸民族に広く公開するため二月四日から休館整理中であつたが藤山副館長、遠藤、小林両博士以下館員一同汗だくの奔走により二十八日諸準備全く完了建国節の三月一日午前十時から再開館した、新陳列品の主なるものをあげると、

- 第一展示室（博物館）には満洲産の哺乳動物（大山猫、イタチ<sup>(3)</sup>、ズミ、ウサギ類、ベストを媒介する鼠類等四十種）興農部寄贈満洲産淡水魚類（松花江に棲息するテウザメ、鯉、カハザメ等三十種）衛生技術廠寄贈の満洲産人体寄生虫三十種、満系各種の靴類、同上流社会の古代衣服袋物類百余点、満洲産有用鉱物（含ニオブ、含コバルト、チューリンゼアイト等二十種類）
- があり、更に第二展示室（物理室）のほか新たに
- 植物室を設置、林野局寄贈の満洲産の菌類（食用菌、有毒菌、木材寄生菌等四十種）満洲産松柏植物の幹材と葉果実の標本、同□<sup>(3)</sup>
- 集四十種を季節順に配列したほか古代からの動植物の発生模様
- の図表
- などがあり満洲国の文化面も漸く整備充実したことを力強く物語つ

てゐる

次に、一九四四年一月以降に実施された二度目の展示替は、市内に分散していた事務室（本城ビル）と列品貯蔵室（蓬萊ビル）を、裕昌源ビルに移転統合させるのにもなうものであった。やや時期がさかのぼるが、「二階を展示所にあて、三階を事務所として開館の予定」<sup>(6)</sup>とする一九四四年五月末の予告記事に依拠すれば、一階に加え二階も展示場とすべく、この時点で予定された同年七月末の開館をめざして準備を進めていたことがわかる。しかし、結果的におよそ一〇ヶ月の休館を要したこの展示替の内容が、実際にどのようなものとなったのかは不明である。

## 二 大経路展示場の変則性

先の経過でも明らかとなり、大経路展示場は紆余曲折を経てオープンしたが、次のような変則性をともなうことになった。

### (一) 立地の変則性

その第一は立地である。大経路展示場は、旧満鉄付属地と旧長春城内との間に展開した旧商埠地内でも城内に隣接する地点にあった。このこととはすなわち、日本人街からの疎遠、交通アクセスの不備を意味するところとなり、例えば、八五〇人を招待した大経路展示場開場式に五二人しか参加せず、さらに中国人が日本人の三倍から四倍という入場者比率となつて現れた。後者については、そもそも新京特別市の人口比率において日本人は少数市民であったためことさら異常な数字ではなかったが、

博物館関係者にとつては、大経路展示場の立地が日本人利用者の動員に困難を来たす有力な原因のひとつとして理解されたのである。ちなみに、すでに別稿で概観した国立中央博物館の「博物館エクステンション」は、欧米の博物館活動や社会活動をモデルにしたものであったが、同時に大経路展示場の立地問題を背景に、積極的に街頭へ進出しなければ日本人利用者を獲得できなかったという現実的な要請にも支持されていたと言えるだろう。

## (二) 建物の変則性

そして第二に、展示場が借家だったことである。裕昌源ビルは博物館の機能から帰納して設計・建築された建物ではなかったため、そこでの展示は変則を免れなかった。それが仮に、当時の日本の博物館建築に求められていた耐火建築という課題を満たしていたとしてもである。

例えば、大経路展示場がオープンする一年前に、副館長の藤山一雄は次のような抱負を述べていた。

中央博物館は如上の理由から、その「成人教育」もさることながら主力を少年の科学教育に注ぎ、その列品の配置、等の如きも小学校五六年生程度に水準を低下し、ジオラマその他の方法により、科学の歴史的祖述に重きを置き、法則の発見、機械の発明等が如何なる経路により招来されたか、その人文との交渉意義、及価値を闡明し、(略)努力すればある水準までの科学意識の向上、その生活化を具現し得るのではあるまいかと信ずる。

ここで言う「主力を少年の科学教育に注ぎ」、水準を「小学校五六年

生程度に」するとは、現在の博物館界で取りざたされる(親切でわかりやすい展示)を意味するものではない。それは、明治以来の日本の初等教育が科学教育をおざなりにしてきたことへのアンチテーゼであった。

そしてこれを実現するために、ジオラマの使用、科学的シナリオなどが掲げられたのである。しかし、大経路展示場の実際は、地質時代絵巻(紙芝居)や、「マンモスの化石頭部及びウスリー産大虎が子供達を悦ばせ」という動物部導入の大型資料展示などにその配慮の跡は感じられるものの、確認できる明らかなジオラマは一点しかなく、この方法を十全に採用することはできていない。次の藤山の反省が、この事態を端的に物語っている(二三八頁)。

尚小面積内に展示を余儀なくされ系統ある陳列方法も不可能、勢ひ散列展示に陥り、またジオラマ式展示も自然科学標品の性質よりして、これを充分利用せねばならないに拘らず、二三のものを除き、ウォール・ケース或はセンター、ケース内に集団陳列を余儀なくされたことは遺憾この上もない。

これによれば、建物の変則性とは狭隘性であったわけだが、それはさらに繁茂な展示替をもたらしした。大経路展示場は約五年間存続したが、この期間中に大規模な展示替が二度おこなわれ、小規模なものも含めると相当な頻度となったに違いない。これは、当初より「なるだけ支障なき限り時機を見て随時陳列替を行ひ、展示の変化と清新を期す」と表明されていたことにも対応するが、要は施設の狭隘性に由来する展示のスクラップ・アンド・ビルドであった。したがって、一度目の展示替の「植物業」も、裕昌源ビル一階には新規に部屋が設けられる構造的条件が備

わっていないため、コーナー展示のようなものだったと思われる。大経路展示場は、さしずめ特別展示の常設展示の観があったと言つてよいだろう。

建物の変則性はまた、いわゆる特別展示のための部屋を持っていないことを意味した。国立中央博物館が新京特別市内で開催した特別展示としては、「シベリア展覧会」（一九三九年七月一―五日）、「日本紀元二六〇〇年慶祝飛鳥奈良文化展覧会」（一九四〇年四月二五日―五月二日）があったが、それぞれ三中井百貨店、敷島高等女学校体育館といった他施設を利用していた。これも、借家、すなわち固有の博物館建築を有していなかったことの帰結だったのである。

### （三）政治・経済情勢の変則性

そもそも大経路展示場がこうした事態に甘んじなければならなかったのは、日中戦争下の満洲国の政治・経済情勢を背景にしていたためである。一方で国立中央博物館は、新京の都市計画で文教地区とされた建国広場に面する場所に敷地を確保し本庁舎建設を予定していたが、戦時体制下の都市計画実現の挫折と相俟つてついに実現することはなかった。展示場の立地と建物の変則性は、そうした情勢下での選択だったわけである。なお細部に及べば、同様の事情はケース製作に際しても現れていた。すなわちスチールの配給の困難であり、特にガラスの輸入を拒まれた際には、その前年に商工省次官となつて帰日していた岸信介の助力を得なければ輸入が実現できなかったと言つてよい。さらに、経費も予算額の二倍を要したことが明らかにされている。

「十五年戦争」総体の原因に位置する満洲国は、国立中央博物館を、そして大経路展示場を産み出したわけだが、皮肉にもその戦争によって自らが否定されるというパラドクスに生来規定されていたのである。

### 三 大経路展示場の一般性

満洲国の政治・経済情勢は、このようにして国立中央博物館を悩ませ続けたが、同時にそれが大経路展示場の展示の根拠となつていたことも知ることができる。展示内容は五つの分野からなり立っていたが、「多少国策に順応する意図」から「重点を鉱物、地質に置い」ていたと言つ（一六九頁）。しかしこれは、現実的には地質学を専攻していた遠藤隆次、野田光雄ら学芸官のそれまでの成果に負つた選択であつた。もちろん、彼らの研究それ自身が、資源開発という国策と無縁でなかったことは言うまでもない。そして、一度目の展示替で「植物室」が設けられ、菌類が展示されたことにも同様の事情を看取できる。「満洲新聞」に掲げられていたように、この展示替で学芸官小林義雄の果たした役割は大きく、菌類を専攻していた小林が一九四一年に赴任したが故のことであつた。しかし、それを可能にした社会的条件とは、戦時下における資源活用というテーマだったと考えてよいだろう。

そして、繁茂な展示替は、単に展示場の狭隘性によるのみならず、戦争によって高度成長を遂げていた科学を反映したものであつた。例えば、国立中央博物館の友的会的組織である満洲科学同好会は、時事に即応するテーマで例会をおこなっていたが、これに連動して展示替をした

と思われるケースがあった。そのひとつは、「満洲産人体寄生虫」展示である。これは一九四〇年三月二五日に開催された第一〇回例会における浅田順一（厚生研究所）の講演「人体の寄生虫に就て」と映画「回虫と人生」の上映というプログラムに対応している。もうひとつは「ペストを媒介する鼠類」展示で、一九四一年一月二四日開催の第一七回例会における阿部俊男（衛生技術廠）の講演「ペストの話」とペスト関係資料展示というプログラムに対応関係が見られる。

このような国策に対応した博物館展示の成立は、ひとり大経路展示場に限られたことでなく、この時代の一般的な現象であった。類例は枚挙に暇がないが、満洲国では、新京動植物園のうちで最も整備が遅れた植物園部門において薬草園だけは設けられて、資源問題を反映していた。そして、これらは単に「国策に順応する」という没主体的な現象ではなく、科学立国あるいは博物館立国をセールス・スローガンとし、国家の承認を得ることを通じて、自らの政治的・経済的・社会的安定と拡大を実現しようとした科学者や博物館関係者のステレオタイプでもあった。これは、戦後になってから（戦争責任）として指弾される現象だが、例えば、廣重徹がその本質を看破したように文部省科学研究費と科学者との関係は、この構造の基本的な不変を教えている。大経路展示場の展示内容の編制を、近代における国家と科学、国家と博物館という観点から見た場合、それはごく一般的な姿だったのである。

#### 四 大経路展示場の特質

このような変則性と一般性とを兼ね備えた大経路展示場には、さらに注目できるいくつかの特質が見られる。

##### (一) 博物館の国際化

満洲国は多民族国家であったため、大経路展示場もこれを前提としていた。民族によって展示場の利用が制限されることは基本的になかったようだが、各民族に対して博物館側から働きかける内容は異なっていた。現在知ることができるのは、日本人（おもに日本族）と中国人（おもに漢族と満洲族）のケースである。

まず日本人に対しては、五族協和の指導民族として、博物館の内容で科学的価値を摂取し、科学の生活化の担い手たらんことを求めた。そして、中国人には次のような働きかけとなった（二三三頁）。

更に（展示場は―引用者注）大経路の如き満人街の中心にあるため、特に清掃を嚴重にし、場内の喫煙も禁止して、入場者にまづ、非常に清潔であるといふ感を懐かせるよう努力してゐる。これも博物館が特に満系市民に対する生活指導の一示唆である。

ところで日本の博物館は、ごく一部あるいはごく最近を除き、在日外国人や国内少数民族といった観光客以外の異民族を、その調査・研究・展示の対象とすることには積極的でも、利用者として対象化することせず、このことに関しほぼ思考停止して発展を遂げてきた。こうした日

本博物館發達史の中で見たとき大経路展示場の異質さが浮き彫りになるが、仮にこれが、日本と満洲国の国民構成の違いに由来する事態であったとしても、単に外国文物の展示や外国語表記、観光外客の誘致という設定では収まりきらない博物館の国際化が大経路展示場で試されていたと言うことができる。現在の日本の博物館にとつて喫緊の課題である国際化問題は、ここに直前の経験と前史を持つているのである。すなわち大経路展示場が教えているのは、日本人と中国人を差異化して、未熟ながらもそれぞれの学習内容と学習方法を設定していた事実である。踏み込んで言えば、伊藤寿朗の言う「場と階段づくり」<sup>10)</sup>の志向が、民族を横断するこの場面で存在していたと言えなくもない。しかし、その当否に及べば、展示場における中国人の学習内容・方法が、あくまで日本人が考えたものでしかなかったという、つまりそのエスノセントリズムに決定的な陥孔があった。満洲国の崩壊に際して、大経路展示場が破壊され奉天分館が存続した事実には、国立中央博物館自然科学部長だった遠藤隆次が反省した中国人学芸官の存否という表面的理由にとどまらない、博物館の思想と実践における国際性の問題がドラスティックに現れていると見るべきである。

なおこの問題に関連して付言すると、「最近、タイのアユタヤにコンセプト作りから建築、展示施工その他すべてに日本が援助して中規模の歴史資料館が誕生した。現地の日本人会や民間からの経済協力が先行して政府援助が実現したきわめて稀な例」として、既存の政府援助の硬直的手法によらない博物館の国際「援助」の有効性が説かれたことがあった。<sup>11)</sup>しかし、そこには大経路展示場の経験を抹殺してきた戦後日本博物

館学の病巣が、見事なまでに愚直かつ象徴的に現れていたと言わざるを得ないのである。

## (二) 衛生啓蒙の変化

そして、日本人によって中国人に与えられた大経路展示場での学習テーマとは衛生であった。<sup>12)</sup>ただしここでは、例えば博物館が衛生展示を催すというような、衛生内容の具体的啓蒙とはなっていない。博物館という施設の形式それ自体が衛生を体現するものとして中国人に示されているに過ぎず、無策とも言えるし素材でもある。もちろん、先述した寄生虫やベストの展示のように、後の展示替では内容の領域にも踏み込んではいいるが、これすらも教育的プロパガンダと言うよりは学術的色彩が濃かった印象を受ける。

あるいは、ここには、衛生問題をめぐる博物館の変化が現れていたのかも知れない。つまり、一九四〇年代前半の内地での衛生展示は、赤字博物館ではまだ活発だったが、東京科学博物館では激減しており、その消滅が戦後だったことから考えると、大経路展示場もすでにこのコースに則っていたと考えられるのである。仮に今これを、〈衛生展示から科学展示へ〉と要約して、日本および日本人が資本主義的近代化の過程で直面してきた社会的課題の変遷の博物館的反映のメルクマールとするならば、すでに展示としてではなく示唆にとどまった大経路展示場での衛生啓蒙のありようには、残存形態という評価を与えることができる。そして、これが残存したのは、当時の日本人が中国人社会を非衛生と認め、自らのたどったコースを適用しようとした、同じくエスノセントリ



ズムによるものと考えられるのである。

### (三) 博物館疲労の主題化

さて第三は、博物館疲労の問題をテーマにした点である。藤山一雄は、「入口に於ける入場者の健康状態を出口まで維持し、最も有効に、明朗愉快に観覧し得、その宿題を解決し、或は疑問を生じ他日の解決に委し、健康にて退場することが最も必要」(二三五頁)と主張し、この場合の所要時間を約二時間位としていた。この主旨は、藤山の博物館関係著作に繰り返し現れるため彼の博物館論の核心であるわけだが、かかる博物館疲労に関する言及は当時では稀だったようである。例えば棚橋源太郎は、「陳列品の分量が多きに過ぎること」を掲げ、これによって「注意が散漫し、主眼点の捕捉に苦しみ、一種の不快を感じる」としていたが、ここではあくまで学習上の弊害として機能的にとらえられている。それに対し藤山は、「大きな博物館に入ると不思議な心理が働き、なんでも一応は凡てのものを観ようといふ欲望に駆られ、途中で焦燥、疲労、困憊し、すっかり健康を害することがありがち」(一六八頁)として、観覧者の心理面からアプローチしていた。いわば博物館の機能以前の問題としてとらえていた形跡があるのである。特注ケースやキャプションなどの意匠にも、この考えを反映させようとしていた。そして、変則性の中で結果した大経路展示場に対して、怪我の功名的な意味あいを込めながら、藤山はこれを理想的なものとして評価したのであった。

さらに、この問題も見方を変えれば、前記の衛生思想を構成する一部とみなすことができるだろう。つまり、衛生思想を啓蒙する博物館その

ものの衛生への問いかけである。利用者に対する衛生啓蒙を(外なる衛生)とすれば、これは(内なる衛生)となる。なお、博物館疲労に関連して、近年、「一般に展示観覧見学の實質時間は30〜45分程度が大半と考えてよく、長くても1時間弱と考えてよい」とする野村東太の調査成果があるが、藤山の示した時間の半分以下となっている。半世紀の間に日本人の時間感覚が変化したと見るべきなのだろうか。向後の検討が必要だが、さらに「従来の展示品数は一般に多過ぎる傾向にあり、学芸員がテーマやストーリーを決めると、つい、あれも入れたい、これも必要となつて、展示品が増えすぎる傾向にある。展示を見るのも、理解するのも、理解した知見を生かすのも、全て選択権は1時間程度以下しかない来館者側にあることを、考える必要がある」と言う野村の苦言に即せば、博物館疲労の問題は現在も根本的に解決されておらず、博物館展示は不衛生のまま、その考え方においては大経路展示場以前なのかも知れない。

### まとめにかえて

日本人にとり、一九四〇年代前半という天皇制ファシズム期の最末期に登場した国立中央博物館の大経路展示場は、自然・理工科学系博物館としては、同じ官立の東京科学博物館や、植民地朝鮮に存した恩賜記念科学館などに比べれば、その開始は圧倒的に遅いものであった。そして、その時代拘束性故の様々な変則性が大経路展示場を規定し、他館に比しての劣勢を強いた。しかし、後発であったが故の進取性もその課題意識

と実践の中には立ち現れていた。本稿はその要点を示してきたわけだが、展示内容にさらに立ち入っておこなうべき、いわば個別分科学面での特質については稿を改めて検証する予定である。

(一九九四年二月二四日)

## 註

- (1) 戦後、関係者が国立中央博物館を概説したものとしては、「博物館」(満洲国史編纂刊行会編『満洲国史』各論、財団法人満蒙同胞援護会、一九七一年)一一一八―一二二頁がある。また、同館に関する先行研究には、原山煌「『満洲国』国立中央博物館の諸活動(一)―定期刊行物について」(『四天王寺女子大学紀要』第二三号、一九八一年)一五八―一七〇頁、同「『満洲国』国立中央博物館の諸活動(二)」(『IBU四天王寺国際教養大学文学部紀要』第一四号、一九八二年)一三四―一四六頁がある。ここでは、同館の活動に対する分析・評価の志向の萌芽は認められるものの、書誌学的な拘束から自由ではなく、博物館学的なアプローチも未組織である。さらに、藤山一雄『新博物館態勢』(東方国民文庫第二三編、一九九〇年)が、伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』第四卷(大空社、一九九〇年)に復刻収録されたのに際して、後藤和民「第四卷『新博物館態勢』解説」(伊藤寿朗監修『博物館基本文献集』別巻、大空社、一九九一年)一五九―一六八頁がなされたが、誤謬に満ちた解説となっている。
- (2) 犬塚康博「博物館史はどう読まれてはならないか―博物館基本文献集」の書評にかえて―(『博物館問題研究』No.三三、一九九三年)一九―二四頁、同「満洲国国立中央博物館とその教育活動」(『名古屋市博物館研究紀要』第一六卷、一九九三年)一一―一五〇頁、同「藤山一雄と満洲国の民俗博物館」(『名古屋市博物館研究紀要』第一七卷、一九九四年)七五―九六頁、同「新京の博物館」(『満洲国』教育史研究』第二号、一九九四年)三〇―四五頁、同「藤山一雄の学芸員観」(『博物館問題研究』No.二四、投稿中)。
- (3) 大経路展示場に関する事実記載は、藤山一雄『新博物館態勢』(前掲註一)に基づいた。註のない引用はここからのものであり、本文中に括弧書きで出典頁を記した。必要に応じて用いたその他の引用には註を付した。なお、引用文は、旧字体の新字体への改変と新聞記事のルビの省略にとどめ、かなづかい、促音便、句読点、地名、誤脱字の表記は原文のままとした。また、年号表記は西暦年を使用し、人物敬称は省略した。
- (4) 例えば、京都帝国大学医学部病理学教室より譲渡された人骨模型が、一九四一年五月上旬以降、大経路展示場に展示されている。「古代人骨模型」(『満洲グラフ』第九卷第六号、一九四一年)三〇頁による。
- (5) 「科学満洲の誇り。新装中央博物館再開館」(『満洲新聞』第一〇四五九号、一九四二年三月二日付)三面。
- (6) 「中央博物館の拡充」(『博物館研究』第一七卷第五号、一九四四年)七一―八頁。
- (7) 藤山一雄「博物館運動の方向」(『北窓』第一卷第二号、一九三九年)二〇―二二頁。
- (8) 藤山一雄「満洲国立中央博物館態勢」(『博物館研究』第一七卷第四号、一九四四年)三頁。
- (9) 藤山一雄「序」(木場一夫編『国立中央博物館大経路展示場第1次列品目録』国立中央博物館、一九四〇年)。
- (10) 佐藤昌「満洲造園史」財団法人日本造園修景協会、一九八五年、九〇

— 九三頁。

- (11) 廣重徹『科学の社会史 近代日本の科学体制』自然選書、中央公論社、一九七三年、一五五頁。
- (12) 伊藤寿朗「地域博物館の思考」(『歴史評論』No.四八三、一九九〇年) 一七頁。
- (13) 遠藤隆次『原人発掘 — 古生物学者の満州25年』春秋社、一九六五年、一五三頁。
- (14) むしろ、一國主義的に展開した日本の博物館こそが、人類史・世界史的に見れば特殊であり、この問題についてはさらに詳細な批判的分析が必要と考えている。
- (15) 森田恒之「いま博物館は」(『月刊社会教育』No.四五六、一九九四年) 一三頁。なお、これについては犬塚康博『博物館問題は、どう扱われてはならないか — 森田恒之「いま博物館は」に関する覚え書き』一九九四年で批判を試みた。
- (16) 衛生思想については、田中聡『衛生展覧会の欲望』青弓社、一九九四年を参考にした。
- (17) 棚橋源太郎『眼に訴へる教育機関』〔復刻〕、大空社、一九九〇年、二九九頁。
- (18) 野村東太「博物館建築の計画と設計(Ⅳ) — 展示空間の計画 —」(『設計資料』58建築編、一九九二年) 五五頁。
- (19) 同前。